著聞抄*1に八椀番とも書る本あり　此番所を
焼火の門とも云　先年馬廻りの侍詰番の所也
其外の役所は部屋といふ

北の丸

臺所の北に阿り　此所に木工方を置て城中乃
修造を務らしむ　俗に**内作事方**と云て　北の丸の
号を呼ふ人稀なり　北の丸之名八吉田城并

【21頁】

廣嶋の城已来呼来て　当城ニも其名を用

井上櫓

北の丸に有櫓也　往古井上氏某此地の守りたりし
故に呼ふ

井上門

井上櫓の脇に有故呼ふなり

右本丸分也　此丸に有所の門・櫓・殿舎等の名義
明かなる所も別の旨阿りて紀(記の誤記)さず　其名義詳(ツマビラ)
かならす所も省きて爰に贅せず*2　余八是に
準(ナゾラ)へ知るへし

北櫓

【22頁】

二の丸の北の詰に有故に此名ありといへり

北之門

宮崎神社の北に有　名義明かなり　此地を**宮崎**
丸といへり

宮崎神社

社家之伝記云　当社八元来甲州宮崎と云地　鎮座
有し也　其地毛利廣元(ヒロモト)・季光*3・傳領之所里也し
故に当家の本居(本拠)の神とす　後大江師親*4之時ニ
至り　藝州高田郡吉田の城中に遷座阿り
今に其旧地を**宮崎丸**といへり　中納言家(宗瑞公ノ御事)当城
を築給う時に　又此地にうつし崇らるゝと云云

【23頁】

本社八幡宮　三座

*1 **古今著聞抄**＝古今著聞集(ここんちょもんじゅう)。鎌倉時代、伊賀守橘成季によって建長六年(1254年)編纂された世俗説話集。七百余りの説話などを神祇・釈教・政道忠臣・公事・文学・和歌・管絃歌舞・能書・術道・孝行恩愛・好色・武勇・弓箭・馬芸・相撲強力・書図・蹴鞠・博奕・偸盗・祝言・哀傷・遊覧・宿執・闘争・興言利口・恠異・変化・飲食・草木・魚虫禽獣の30編にまとめた物です。

*2 **贅**＝つづる。あつめる。「贅」は剰余物、付属物、無駄などの意味がある。「贅文」は無駄な文章。従って「贅せず」は余計な事は書かないと言う意味。

*3 **廣元・季光**＝【毛利家家系】　維光(大江)―廣元―季光(毛利)―経光―時親―貞親―親衡―元春―廣房―光房―凞元―豊元―弘元―興元―幸松丸―元就―隆元―輝元―秀就…。廣元までは大江姓、季光が初めて毛利姓を名乗った

*4 **大江師親**＝毛利元春のこと。

所祭神　玉依姫(タマヨリビメ)*1
誉田天皇(ホンダノスメラミコト)*2　神功皇后
御城八幡宮　三座　神功皇后
所祭神　応神天皇
仲姫(ナカツヒメノミコト)命*3
御城荒神社　三座　神素戔鳥(嗚)尊
所祭神　素戔鳥(ハヤスサノオノカミ)尊
速素盞鳥尊

崇め祭らる丶例(タメシ)なし　爰に吉田家の傳書中臣抜抄云　素戔嗚尊は悪神とて日本に八勧請セずして御子大巳貴を出雲大社と勧請する也　後に大巳貴の父神を請し申さる丶　依て末代に素戔嗚尊を以て本主とす（已上中臣ノ抜抄之詞也）　素戔嗚尊最初垂跡の事八初め

【24頁】

右傳記云　此両社八往古より此地に鎮座之神なりと云云
荒神社八一ニ大巳貴尊(オオナムチノミコト)*4と云　一八素戔嗚尊を祭
といへり　社家の傳記異同紛然たり　凡(オヨソ)神代より素戔
嗚尊(ノミコト)は根国底国*5に追儺(オニヤライ)*6給ひて豊秋津洲(トヨアキツシマ)*7の内ニハ

*1 **玉依姫**＝(たまよりびめ)綿津見大神(海神)の子で、豊玉姫の妹。トヨタマビメが産んだホオリの子であるウガヤフキアエズ(すなわちタマヨリビメの甥)を養育した、後にその妻となり、五瀬命(いつせ)、稲飯命(いなひ)、御毛沼命(みけぬ)、若御毛沼命(わかみけぬ)・神日本磐余彦尊(かむやまといわれびこ・後の神武天皇)を産んだ。

*2 **誉田天皇**＝(ほんだのすめらみこと)第15代応神天皇のこと。諱は誉田別尊(ほむたわけのみこと)、大鞆和気命(おおともわけのみこと)。誉田天皇(ほむたのすめらみこと)ほんだのすめらみこと)、胎中天皇(はらのうちにましますすめらみこと)とも称される

*3 **仲姫命**＝(なかつひめのみこと)応神天皇の皇后。応神天皇との間に仁徳天皇を儲ける。

*4 **大巳貴尊**＝神格・国津神の元締め、国造りの神、農業神、商業神、医療神、神徳・縁結び、他すべてのことに発揮。素戔嗚尊の子の孫という説や、第6・7世の孫という説あり。

*5 **根国底国**＝黄泉の国。根の国＝大地、地面。底の国＝黄泉の国。根国底国とは、現世と死後の世界で、根の国と底の国を行ったり来たりしているの意。大祓祝詞に出てくる根国、底国とはあの世のこと。そこにおられる速佐須良比売(はやさすらひめ)という神は、罪穢を洗い流し捨て去って下さる神。サスラヒの解釈の一つとして、サスル(摩擦する)という意味がある。サスラヒヒメとは総ての悪いものを摩擦し、その穢を落として、正しくする御徳に対して名づけたもの。即ち根国、底国では、罪穢を再び美しい元の姿に磨き清めて下さるという。祓とは正しい姿にかえすことを目的としている。

*6 **追儺**＝(ついな)おにやらい、まめまき。

*7 **豊秋津洲**＝日本本州のこと。

播磨の明石浦に垂跡して　同国廣峯*1に移す（二十二社註式）*2
吉備公帰朝の日に崇奉る（吉備真備）（峯相記に見えたり）　貞観十一年始て

【25頁】

播州より遷座（改舊雑書証）　山城白川*3に移利（二十二社註式）　同十八年
六月二咸神院こうつす　吉田家曩祖日良麻呂*4其事
に預る（中臣抜抄に見えたり）　是則素戔嗚尊を祭る起源と云云

熊野社　三座
所祭神　速玉男（ハヤタマノオ（ノミコト））*5
伊弉冉尊（イザナミノミコト）
事解男（コトサカノオ）*5

末社　一座
厳島社　市杵嶋姫（イチキシマヒメ）*6
所祭神
天神社　三座
所祭神　中将殿（在原業平）　菅相国（菅原道真）　吉祥女（キッショウメ）*7

*1 **廣峯**＝兵庫県姫路市の広峰山山頂にある廣峯神社。全国にある牛頭天王（ごずてんのう）の総本宮（八坂神社も牛頭天王総本宮を主張）。別称広峯牛頭天王。素戔嗚尊・五十猛命を主祭神として正殿に祀り、左殿に奇稲田姫尊・足摩乳命・手摩乳命、右殿に宗像三女神・天忍穂耳命・天穂日命ほかを祀る。摂社、末社として、西の白幣山には吉備神社、荒神社、本殿周辺に熊野権現社、稲荷社、天神社、冠者殿社、大鬼社、庚申社、山王権現社、蛭子社、軍殿八幡社、地養社、東の峰には天祖父神社を祀る。『播磨鑑』には「崇神天皇の御代に廣峯山に神籬を建て」とある。天平5年（733年）、**唐から帰った吉備真備が都へ戻る途中この地で神威を感じ、それを聖武天皇に報告したことにより、翌天平6年（734年）、白幣山に創建された**のに始まると伝えられる。素盞嗚神社（福山市）社伝によれば吉備真備は備後から勧請したという。天禄3年（972年）に現在地の広峰山頂に遷座した。牛頭天王に対する信仰は、御霊信仰の影響により、厄いをもたらす神を祀ることで疫病や災厄を免れようとするもので、当社においては主として稲作の豊饒を祈願した内容の信仰となった。これを「広峯信仰」と呼び、当社が古くから農業の神として崇拝された所以である。明治の神仏分離令までは天王山増福寺、広嶺山増福寺等と称し、江戸時代は徳川将軍家の菩提寺である東叡山寛永寺の支配下にあった。鎌倉時代から室町時代にかけては、当時多くの神社がそうであったように神官が御家人・地頭を兼ね繁栄した。湊川の戦いにも出陣、北朝の側についている。社家については、古くは75家あったと伝わるが、永禄年中の戦乱の影響で社勢が衰え、江戸時代頃までに「広峯三十四坊」が残り、その後、寛文年中には33家、安永年中には25家となった。ただし、34家という社家の枠は残り、逼塞等で不在となった家は他の社家が兼帯した。江戸時代中期以降の主な社家には、廣峯・肥塚・魚住・椙山・谷・小松原・谷口・神崎・金田・竹田・竹井・柴田・内海・福原・粟野・大坪・芝・馬場・尾代等がある。

*2 **二十二社註式**＝神社の社格の一つ。国家の重大事、天変地異の時などに朝廷から特別の奉幣を受けた。後朱雀天皇治世の長暦3年（1039年）に22社目の日吉社が加わり、白河天皇治世の永保元年（1081年）に制度としての二十二社が確立したとされる。主に畿内の神社から選ばれた。文明元年（1469年）に吉田兼倶が撰したとされる『二十二社註式』には冒頭に二十二社の成立次第を揚げている。

*3 **山城白川**＝現在の左京区、北白川と岡崎。かつて京都洛外、山城国愛宕郡に属していた白川流域を指す。本来は白川の南側地域のみを指していたが、後に北側地域も含むようになり南側を「南白河・下白河」（現在の岡崎）北側を「北白河」と称した（『山城名勝志』）。平安遷都直後の白河は鳥辺野などとともに葬送地であったが、、藤原良房が白河に別業（別荘）である白河殿を造営して以後、別業・寺院の建立が相次いだ。

*4 **日良麻呂**＝中臣日良麻呂。神祇伯左中将従四位上卜部氏祖（群書系図部集巻第百七十七大中臣系図）

*5 **速玉男**＝（はやたまおのみこと）伊邪那岐命・伊邪那美命は日本の国と大勢の神々を産んだ夫婦の神様。妻の伊邪那美命は早く亡くなったので夫、伊邪那岐命は、妻伊邪那美命を現世へ連れ戻そうとして黄泉の国へ迎えに行く。黄泉の国で再会した妻、伊邪那美命は夫、伊邪那岐命の願いに応えて現世に帰る準備をしたが、その間絶対に姿を見てはならぬと約束したにもかかわらず夫、伊邪那岐命は待ちきれずに妻、伊邪那美命の姿を覗き見た。黄泉の国の食べ物を口にしたことによって、穢れて醜くなった妻に怖れおののいた夫、伊邪那岐命は慌ててその場から逃げ出した。穢れた姿を見られた妻は怒り狂いながら、逃げる夫、伊邪那岐命を追いかけた。妻と、ともに追ってくる邪鬼どもを振り切って、2人は現世と黄泉の国との境で永遠の別れをした。この後で夫「伊邪那岐命」の吐いた唾から生まれたのが「**速玉男命**（はやたまのおのみこと）」、掃き払ったところから生まれたのが「**事解男命**（ことさかのおのみこと）」の2柱の神様という神話。

*6 **市杵嶋姫**＝日本神話に登場する水の神。『古事記』では市寸島比売命、『日本書紀』では市杵嶋姫命と表記する。アマテラスとスサノオが天真名井で行った誓約の際に、スサノオの剣から生まれた五男三女神の一柱。『古事記』では2番目に生まれた神で、別名が狭依毘売命（さよりびめのみこと）であり、宗像大社（福岡県宗像市）の中津宮に祀られている。『日本書紀』本文では3番目に、第二の一書では最初に生まれたとしており、第三の一書では最初に生まれた瀛津嶋姫（おきつしまびめ）の別名が市杵嶋姫であるとしている。神名の「イチキシマ」は「斎き島」のことで、「イチキシマヒメ」は神に斎く島の女性（女神）という意味。厳島神社の祭神ともなっており、「イツクシマ」という社名も「イチキシマ」が転じたものとされている。

*7 **吉祥女**＝（きっしょうめ）901年大宰府に左遷された菅原道真公の夫人。同年奥州胆沢郡母体（いさわぐんもたい＝現在の奥州市前沢区母体）に3人の子どもと従臣とともに配流され、903年道真公の訃報を受けて病に伏し、906年に逝去した。

山王社　一座

【26頁】

所祭神　素戔嗚尊

一書云

稲荷社　三座

客人宮(マロウドノミヤ)*1

倉稲魂(ウカノミタマ)*2

命婦宮(ミョウブ)*3

所祭神

歸一権現霊社　三座

所祭神　社家深秘云云

今歸一権現霊社　三座

社家深秘云云

八神殿*4　八座

神皇産霊尊(カミムスビノミコト)*6

玉皇産霊尊(イクムスビノミコト)

生皇産霊尊(タルムスビノミコト)

是皇産霊尊(足カ)

大宮売女尊(オオミヤメノミコト)

御食津命(オオミケツヒコ)

事代主命(コトシロヌシノミコト)

日本国中神祇惣社　一座

所祭神　三千余神

神明内宮　三座

【27頁】

所祭神　高皇産霊尊(タカミムスビノミコト)*5

【28頁】

所祭神　天照皇太神

手力雄命(タジカラオノミコト)*7

*1 **客人宮**＝(まろうどのみや)他の地域から来訪し、その土地で信仰されるようになった神を客人神という。

*2 **倉稲魂**＝倉稲魂大神(うかのみたまのおおかみ)。　稲をはじめ穀物を司る神(保食神)。五穀豊穣を祈り、生活全般の幸福をお願いする神。

*3 **命婦宮**＝(みょうぶ)律令制下の日本において従五位下以上の位階を有する女性、ないし官人の妻の地位を示す称号。または稲荷狐の異名。

*4 **八神殿**＝次頁の八つの神殿。28頁注2参照。

*5 **高皇産霊尊**＝(タカミムスビノミコト)本来は高木の神格化されたものを指したと考えられている。「産霊(むすひ)」は生産・生成を意味する言葉で、神皇産霊神とともに「創造」を神格化した神であり、女神的要素を持つ神皇産霊神と対になって男女の「むすび」を象徴する神であるとも考えられる天照大神の御子神・天忍穂耳命(アメノオシホミミノミコト)が高皇産霊神の娘と結婚して生まれたのが天孫ニニギノミコトであるので、タカミムスビは天孫ニニギの外祖父に相当する。

*6 **神皇産霊尊**＝カミムスビ(カミムスヒ、カムムスビ)は、日本神話の神。『古事記』では神産巣日神、『日本書紀』では神皇産霊尊、『出雲国風土記』では神魂命と書かれる。天地開闢の時、天御中主神・高皇産霊神の次に高天原に出現し、造化の三神の一とされる。本来は性のない独神であるが、造化三神の中でこの神だけが女神であるともされる。また、先代旧事本紀においては、高皇産霊神の子であるとも言われる。大国主が兄神らによって殺されたとき、大国主の母が神産巣日神に願い出、神皇産霊尊に遣わされた蚶貝姫と蛤貝姫の治療によって大己貴命は蘇生する。

*7 **手力雄命**＝(アメノタヂカラヲ)は、日本神話に登場する神。『古事記』では天手力男神、『日本書紀』では天手力雄神と表記される。岩戸隠れの際、岩戸の脇に控えており、アマテラスが岩戸から顔をのぞかせた時、アマテラスを引きずり出して世界に明るさが戻った。力の神、スポーツの神として信仰されている。

神明外宮　四座
大玉命
所祭神　四座
瓊々杵尊(ニニギノミコト)*2
豊受皇太神(トヨウケノオオカミ)*3
児屋根命(コヤネノミコト)*4
萬幡姫(ヨロズハタノヒメ)*1

祭らるゝ所と同し事にや　山城吉田に祭る所左の如し

八神殿*5(在大元宮 後南向)　額元本八神殿
外宮殿(在八神殿ノ西)　額外宮宗
内宮(在八神殿ノ東)　額内宮源
右所祭神與當社同
日本国中惣摂社(在大元宮 東西)
額(山城国中 百二十神)
額(大和国中 二百八十六神)
以下畧ス之　額ノ書法如此　東方北始リ山城ニ　西方ノ北
至ル對馬ニ(壱岐 對馬)　通計額六十八　是所日本六十六州
如二嶋(壱岐 對馬)　祭神三千六十三神(与延喜式大同小異ナリ)　吉田
家之勧請ニ而　有ト別傳云云

右当時社家の傳説也　昔年當社の大宮司井上某(罪ありて左遷す)
故に此家改姓せり　語り傳りし八当社に八神殿・内宮・外宮・日本国中
惣摂社等崇奉らるゝ事八由緒有事也　是は藝州
吉田(ヨシダ)村に山城の吉田の神社を移し祭られ侍りしを　此地ニも
遷座阿る成りと云云　此説に據(バ)れ者　当社も山州の吉田ニ

弁天社　一座
所祭神　市杵嶋姫(イチキシマヒメ)*6

【29頁】

【30頁】

*1 **萬幡姫**＝、日本神話に登場する神。『古事記』では萬幡豊秋津師比売命(よろづはたとよあきつしひめのみこと)、『日本書紀』本文では栲幡千千姫命、一書では栲幡千千媛萬媛命(たくはたちぢひめよろづひめのみこと)、天萬栲幡媛命(あめのよろづはたひめのみこと)、栲幡千幡姫命(たくはたちはたひめのみこと)と表記される。では高皇産霊神(高木神)の娘。天照大神の子の天忍穂耳命と結婚し、天火明命と瓊瓊杵尊を産んだ。

*2 **瓊々杵尊**＝(ににぎのみこと)天照大神の子である天忍穂耳尊と、高皇産霊尊の娘である栲幡千千姫命(萬幡豊秋津師比売命)の子。『日本書紀』の一書では天火明命の子とされている。

*3 **豊受皇太神**＝(トヨウケノオオカミ)伊勢神宮外宮に祭る衣食住の守り神。中世において豊受大神は、天御中主神(あめのみなかぬし)さらに　国常立尊(くにのとこたちのみこと)と同体視され、その御顕現の神を**倉稲魂命**(稲荷大神)と申す。日天・火徳の天照大御神に対し、月天であり水徳を担う宇宙の根源的な神であるとされ、豊受皇太神(とようけすめおおみかみ)、さらに天照坐止由気(あまてらしますとゆけ)皇太神とも呼ばれた。稲の豊穣にかかわる神として崇められる。

*4 **児屋根命**＝天児屋根命(アメノコヤネノミコト)。日本神話に登場する神。神社の祭神としては天児屋根命とも表記される。**春日権現**とも呼ぶ。妻は天美津玉照比売命(あめのみつたまてるひめのみこと)。居々登魂命の子。岩戸隠れの際、岩戸の前で祝詞を唱え、天照大神が岩戸を少し開いたときに太玉命とともに鏡を差し出した。天孫降臨の際三ギに随伴し、中臣連などの祖となったとされる。名前の「コヤネ」は「小さな屋根(の建物)」の意味で、託宣の神の居所のことと考えられる。中臣連の祖神であることから、中臣鎌足を祖とする**藤原氏の氏神**として信仰された。祝詞の神、出世の神ともされる。

*5 **八神殿**＝八神殿(はっしんでん)は、日本の律令制の下で神祇官西院に設けられた、天皇を守護する八神を祀る神殿である。八神殿に祀られる神は以下の神である。『延喜式』と『古語拾遺』で表記が異なるが、同じ神である。延喜式/古語拾遺　読み　第一殿　**神産日神**　神皇産霊神　かみむすびのかみ　第二殿　**高御産日神**　高皇産霊神　たかみむすびのかみ　第三殿　**玉積産日神**　魂留産霊　たまつめむすび　第四殿　**生産日神**　生産霊　いくむすび　第五殿　**足産日神**　足産霊　たるむすび　第六殿　**大宮売神**　大宮売神　おおみやのめのかみ　第七殿　**御食津神**　御膳神　みけつかみ　第八殿　**事代主神**　事代主神　ことしろぬしのかみ

*6 **市杵嶋姫**＝日本神話に登場する水の神。『古事記』では市寸島比売命、『日本書紀』では市杵嶋姫命と表記する。アマテラスとスサノオが天真名井で行った誓約の際に、スサノオの剣から生まれた五男三女神の一柱。『古事記』では2番目に生まれた神で、別名が狭依毘売命(さよりびめのみこと)であり、宗像大社(福岡県宗像市)の中津宮に祀られている。『日本書紀』本文では3番目に、第二の一書では最初に生まれたとしており、第三の一書では最初に生まれた瀛津嶋姫(おきつしまびめ)の別名が市杵嶋姫であるとしている。神名の「イチキシマ」は「斎き島」のことで、「イチキシマヒメ」は神に斎く島の女性(女神)という意味。厳島神社の祭神ともなっており、「イツクシマ」という社名も「イチキシマ」が転じたものとされている。

庚申社
所祭神　一座　猿田彦命(サルタヒコノミコト)*1
若宮　一座
所祭神　大鷦鷯尊(オホサザキノミコト)*2

荒川櫓
満願寺の東に阿り　此地満願寺家老荒川氏居住す　故に此名あり

満願寺
當寺ハ聖武皇帝天平年中に藝州西条鏡山

【31頁】

の桙に草創　行基菩薩の造寺住持すと云云
時宗たりしを後改宗して真言の道場とす
当寺の説ニ後吉田郷郡山に移すと云云　中興開山覚秀僧都招居
なり　当寺ハ仁和寺の院家地也　慶長年中に
当寺を当城に移して今の地に有り(是当城より登門ニ当る)　(註)「登門」は「北門」の誤記か)
防長両国の密宗の惣録*3として諸寺を所務すへき
の由御宝法務宮*4より令旨を給ハりて　累世

是を傳法と号　院号を安狼(アンヨウ)と云　寺号満願
寺といふ　其義秘蔵宝論ニ云　法ノ名諸仏師
佛傳法人也ト云云　尊勝陀羅尼経ノ疏(安楽カ)*5ニ云
阿弥陀佛国　或ハ謂安養ト　或謂安等ト　云云　呼字

【32頁】

義ニて能満ス一切衆生ノ希願ヲ　是云能満願義ト云云
蓋此義ニ據れりと云云　往古ハ本堂に阿弥陀佛ヲ
安置せしにや　安狼(アンヨウ)院の号ハ其義に據れり(る)と
見ゆると僧衆の古老ハ申傳へ侍り　藝州吉田
満願寺有し時
元就公詠艸云
　満願寺にて椿を見侍りて
面影ハ太(ミ)山木なから花ざと母(も)　今朝白露の玉椿かな
梓弓春のひかりの玉椿　八千世も同じ盛りをや見ん
椿ハ八千歳を春とし　八千歳を秋とするよし傳れハ
分国の栄へおしはかる禮(れ)候

【33頁】

*1 **猿田彦命**＝日本神話に登場する神。『古事記』および『日本書紀』の天孫降臨の段に登場し『古事記』では猿田毘古神・猿田毘古大神・猿田毘古之男神、『日本書紀』では猿田彦命と表記する。邇邇芸尊が天降りしようとしたとき、天の八衢(やちまた)に立って高天原から葦原中国までを照らす神がいた。その神の鼻長は七咫、背長は七尺、目が八咫鏡のように、またホオズキのように照り輝いているという姿であった。そこで天照大神と高木神は天宇受売命(あめのうずめ)に、その神の元へ行って誰であるか尋ねるよう命じた。その神が国津神の猿田彦で、邇邇芸尊らの先導をしようと迎えに来たのであった。邇邇芸尊らが無事に葦原中国に着くと、邇邇芸尊は天宇受売神に、その名を明らかにしたのだから、猿田彦を送り届けて、その名前をつけて仕えるようにと言った。そこで天宇受売神は「猿女君」と呼ばれるようになった。

*2 **大鷦鷯尊**＝第16代仁徳天皇のこと。名は大雀命(おほさざきのみこと)(『古事記』)、大鷦鷯尊(おほさざきのみこと)大鷦鷯天皇(おほさざきのすめらみこと)・聖帝(『日本書紀』)・難波天皇(『万葉集』)。

*3 **惣録**＝すべまとめること。(或いは僧録か。)

*4 **法務宮**＝仁和寺総法務宮。

*5 **疏**＝(そ)箇条を分けて陳述。書物等を註釈する。意義をとく。本文の意が閉塞するところを分疏する意。因みに「解」は本文の難所を講解する意。「註」は訓釈。「述」は文章著述のこと。「傳」は経を主として別に書を編集する事を言う。

右彼卿の御詠草*1の批判の詞ハ　*2西三条実澄卿
書給へり　彼奥書之詞書畧之（号称名院）

郭公したひも阿へぬ一こゑに　名残露けき森の下草
神やなるうけつく道も我国と　世を敷嶋の大和ことのは（知）

于時元亀第二暦*3仲呂吉辰懸車*4ノ老翁特メ進スト實澄ニと云云（七十歳ノ事）

本堂
　本尊　千手観音（行基菩薩作）
護摩堂
　本尊　不動明王（弘法大師作）

天満宮

【34頁】

満願寺西に阿り　菅神真（道真カ）政の画像を安置して
崇め祭らるゝ
所祭神　菅大臣

【35頁】

三摩地院　（号高岑山三摩地院永長寺）

当院ハ元来藝州江田村に有て真言の道場也
開基・時代詳ならす　爰に前黄門大江卿の
加持僧良件呼僧都*5を以て住持職とす　于時（トキニ）
天正八年春二月入院云云　故に良呼僧都を
中興の祖とす　後に国君当城に移り居給ふ
良呼も共駕に倍（陪）従し　古春日の薬師堂に
暫く住居す　今の寺院当城の鬼門に当れる

故に一宇越（を）創建し　呼件を開山始祖として藝州
の古号高峯山三摩地院永長寺を以名とす
山号ハ呼字義文に高峯觀三味と云義に據
れり　院号ハ理趣経*6の金剛三摩地*7の義を取り
永長の二字ハ　後漢書*8ニ　稟（ウクル事）国ヲ永長　為後代之
法と云文を用ひて　国家永長の義を祝したり
と云

*1 **詠草**＝詠んだ歌や俳諧を紙に書いたもの。詠進をするときなどの公式の竪(たて)詠草と、添削を請うときなどの折り詠草とがある。

*2 **西三条実澄**＝(さんじょうにし　さねき、永正8年8月4日～天正7年1月24日)戦国時代の公家・歌人・古典学者。初名は実世、34歳の時に実澄、64歳の時に実枝と改めた。法名は豪空、玄覚。号は三光院。官位は内大臣正二位。後、織田信長の推挙により大納言に任じられた。三条西家に代々伝わる古今伝授は一子相伝の秘事。毛利元就の死後「毛利元就詠草連歌」2巻2冊を元亀3年(1572)当代和歌連歌の第一人者である里村紹巴、聖護院道澄と共に編纂している。(財団法人　防府毛利報公会所有。山口県文化財)

*3 **元亀第二暦**(以下)＝「于時元亀第三暦仲呂吉辰懸車老翁特進実澄」が正しい。(毛利元就詠草〈毛利元就詠草自筆稿本残巻〉)

*4 **懸車**＝年老いて官職を辞すること。七十歳の別称。

*5 **良件僧都**＝「萩古実記未定之覚」では行件僧都。

*6 **理趣経**＝(りしゅきょう)「金剛頂経」の第6会にあたる密教の経典。主に真言宗各派で読誦される。『理趣経』という場合は、「大楽金剛不空真実三摩耶経」(たいらきんこうふこうしんじさんまやけい、大いなる楽は金剛のごとく不変で空しからずして真実なりとの仏の覚りの境地を説く経)、あるいは「般若波羅蜜多理趣品(はんにゃはらみたりしゅぼん)」の略である。

*7 **三摩地**＝三昧(さんまい、Samādhi, サマーディの音写)仏教における禅、ヒンドゥー教における瞑想において、精神集中が深まりきった状態のこと。サマーディは三摩提、三摩地などとも音写される。

*8 **後漢書**＝中国後漢朝について書かれた歴史書。二十四史の一つ。本紀十巻、列伝八十巻、志三十巻の全百二十巻からなる紀伝体。成立は5世紀南北朝時代の南朝宋の時代で編者は范曄(はんよう、398年～445年)。

本堂
本尊　観世音菩薩行基菩薩作

三摩地櫓
三摩地院の東にあり　故に此名あり

【36頁】

舟入門
三摩地院の東に阿り海面の門なり　此門外に船場あり　故に此名を呼ふ

塩櫓
冠木(カブキ)門の東北に阿り　此櫓に塩を多く貯へ置れし故に此名阿りと云云
一説潮見櫓と云　海面の潮の乾満(干満)を窺見る故に此名阿りしを後ハ畧して塩櫓と云也

冠木(カブキ)門 *1
臺所門より時鞁(トキウチ)門に出る中間の門也　塩櫓の脇に有　門の形を以て名とす

【37頁】

革櫓
冠木(カブキ)門の北に有　此櫓に牛馬の革多く貯へ置て軍器の用とす　故に此名有

三重門 *2
時鞁の門乃東脇に有り　義ハ称号のごとし

時鞁(トキウチ)門
搦手口の東の門を云り　時鞁(トキウチ)(止幾宇知)門といふ事ハ此門の西方の櫓に漏刻 *3 の鞁を置て昼夜の長短と十二の時刻を告知らしむ故に称する也

時鞁(トキウチ)櫓
搦手口の門の西に阿り　此櫓に漏刻の鞁を置　故に

【38頁】

此名阿り

志於美(シオミル)櫓
時鞁(トキウチ)櫓の西に阿り　古老云志於美(シオミル)(也倶羅)とは大手搦手の兵士の虚実を窺ひ見る故に見士を以て名とす
城取の口傳に侍るとなん語り侍る也　一云此櫓乃下にも塩を貯へ置れし故に当時塩櫓と云也　両説是非を知らす

南門

*1 **冠木門**＝(かぶきもん) 門柱に貫(ぬき)をかけたもの。江戸時代には櫓門や楼門ではない平門を指していたが、明治以降は屋根を持たない門を指すことが多い。
*2 **三重門**＝三階矢倉ともいう。
*3 **漏刻**＝水時計のこと

大手の門を云り　事ハ明白也

月見橋

月見門の前に有故に月見橋と(闕幾美乃波之)云り　欄干(欄)檻

【39頁】

擬寶珠(ギボシ)*1等有り

青貝櫓*2

南門の西深野町の北に阿り　海手の櫓也　城州(山城国)

伏見の屋形の青貝門を解て此櫓に入置れしと也

伏見の屋形と申ハ太閤秀吉公伏見の城に御座

せし比(コロ)　前黄門輝元公卿*3の屋形も彼地に有しに

秀吉公此屋形に渡御し給ふ　其時に造修せられし

門なりと云云　後に彼門当地の龍昌院(タツル)ニ建門と云云

亦当家を屋形と称する事ハ輝元卿の時に

公方光源院*4義輝公より御諱の字并屋形の号を

賜ふ所なりと云云

【40頁】

武庫

往古の蔵元也　後に天和年中當庫を爰に移して

大小の武具を蔵むる所(俗に武具方といふ)

厩

武庫方の西隣なり

八間櫓

武庫の西に有　此櫓の間数南北八間有　此故に

号すと云云

西の門

厩の北　洞春寺之東脇に阿り　義ハ明也

洞春寺(号正宗山洞春寺)

【41頁】

西丸の西に阿り　当寺ハ藝州高田郡吉田村に

草創　禅宗臨済派嘯兵衛席大禅師*5を

開山始祖とす　旧跡今に吉田村に阿り　後に同国

廣嶋の城下の川西の地に移す　今もその地を

洞春寺村と云是也　慶長年中に当城を築給ふ

の時に　又爰に移して伽藍造建し給ふ　山を正宗

---

*1 **擬寶珠**＝(ぎぼし・ぎぼうしゅ)建築物の高欄や橋の頭部を飾る宝珠形の装飾金具。瓦・石または木をそのまま用いたものもある。

*2 **青貝櫓**＝青梅矢倉、青海楼ともいう。

*3 **公卿**＝「公」と「卿」のどちらか一方が衍字であろう。

*4 **光源院**＝足利14代将軍義輝。永禄8年没。法号「光源院殿贈一品左相府融山道圓大居士」。

*5 **嘯兵衛席大禅師**＝「萩古実未定之覚」では「嘯嶽日僻虎大禅師」とある。